

「受信力」を高める

今の時代は、まさに「発信力」の時代です。SNS やインターネットを始め情報発信のツールも格段に進化し、世界中の至る所に自分の意見や言葉を届けることができます。大いなる発信力は、世界中のあらゆる人と瞬時につながり、自尊感情を大いに高めてくれるかもしれません。

一方で、発信することの大事さが強調されればされるほど、逆にすっかり衰えてきているのが「受信する」力といえないでしょうか。他人の発信している小さなサインやシグナル、他人のつぶやきや沈黙、そうした他者の存在というものを、自分から受け止めることができる確かな「受信力」が徐々に衰弱し、今の日本社会のあり方まで歪ませていると感じるのは私だけでしょうか。社会の孤立や分断は進んでいるように感じます。

今、どの学校でも、子どもの自殺の未然防止などを目的として、「SOS を出すための教育」に継続的に取り組んでいます。「心配なことや悩みごとがあったら遠慮せずに、自分の周りにいる信頼できる大人に勇気を出して相談してみましょう…」と私も校長時代よく生徒たちに訴えていました。しかしながら、学校評価の結果などを見ると、教師に進んで相談する生徒の割合は毎年なかなか増えることがなく、子どもの相談対象として教師が思うように期待されていないのはなぜだろう…と自らに問いかけていました。

私が感じていたのは、「教師自身が自ら SOS を出していないのではないか？」ということでした。校長として、「教職員の心理的安全性を保障する学校づくりができているのか?」、「若い先生にとって、同僚や先輩の先生が指導上の悩みや不安を打ち明ける相手になっているだろうか?」、「職員室の中は、先生たちが安心して自由に話ができる場になっているだろうか?」、「教職員同士で雑談やグチが言い合える時間や場が保障されているだろうか?」校長時代、私はそんなことをよく考えていました。もし教職員が SOS を出せていないとしたら、子どもに SOS を出すことを求めることは、やはりなかなか難しいのではないかと考えています。

もう一つは、私たちが SOS を受け止める力を高めることです。相手の言葉にじっと耳を傾けて聴き取ること、相手の沈黙にじれずにじっと待つこと、時にはただそばにいて寄り添うこと、そんな力を取り戻す必要があるのかもしれません。

その人が本当に自分を受け止めてくれる人かどうかを子どもは瞬時に見抜く力を備えていると思っています。見せかけだけの「受信力」を振りかざすことは、かえって子どもの心を閉ざしてしまうのではないのでしょうか。教室の中には必ず先生が受け止めてくれることをじっと待っている子がいるはずです。そんな一人にそっと寄り添う力を身に付けたいものです。